

## ボートセーリング

平成29年2月12日記

石川 秀幸

古い記憶に始まるが、昭和39年東京オリンピック頃のことである。日本火災海上保険の代理店をしていた私は、横須賀市本町の営業所へ車で出掛けた。車は一番古い型の日産ブルーバードだった。年配の所長と若い田中さんは、営業に自転車を使う時代だった。田中さんは近頃転勤した人で、「石川さんヨットに乗りませんか」という。「いいですねえ。風を帆に受けて走るの最高遊びですねえ」。彼は会社のヨット部員で、大坂支店に勤務していた。横須賀に転勤して葉山の鑑摺（あぶずる）ヨットハーバーで乗るという。でも、セール（帆）やラダー（楫）は上山口の社員寮に保管してある。そこで、私の車をアッシー君として期待し、私も思いもしない贅沢なセーリングを楽しめる。

暑い夏の土曜日の午後、横須賀営業所で田中さんを乗せる。上山口の寮で帆や舵をトランクに入れ、鑑摺ヨットハーバーの門の脇の道路に車を止める。道路に駐車禁止の無い時代だった。

田中さんが事務所に入り、暫くして港に出て来たヨットに乗り、岸壁でフィッティング（艀装）に忙しい。終わって私も乗込む。江の島を目指す。船材はベニヤ板で真っ白に塗られ「シーホース」の名称。セールはケンパスで、転覆したら救助艇を頼むという。しかし、安定しているので、5～6人は乗れるという。二人は海水パンツだけで帽子も被らない。確かに暑いですが、それを上回る涼しい海風が、優しく裸を撫でてくれる。滑るように走るセーリング、逗子海岸は海水浴の人で大賑わい。色とりどりのパラソルの花も見事に咲いている。小坪の岬を廻ると鎌倉市材木座・由比ヶ浜が大きな弧を描く砂浜は海水浴客とパラソルの花の景観に溜息。このような賑わいを海岸道路で車から何度も見ていたが、沖から砂浜を眺める新鮮な景観に感動する。

稲村ヶ崎を超えると七里ヶ浜の長い渚になる。高い波を巧みに利用する勇者のゲレンデなのだ。サーフィンを楽しむ彼等を、私の若い頃、それもスキーリフトの無い頃、時間を掛けて登ったゲレンデを、一瞬に滑り降りる様子に、大層似ていると何時も思っていた。

江の島に近付いたので、タッキング（左旋回）して戻る。帰りの航路は何回もタッキングやジャイビング（右旋回）の訓練である。日暮れまでセーリングを楽しんだ。途中、喉が渴いたので載せておいたコーラを飲もうとすると、瓶が無造作に置いて転がっていたので、物凄い泡と暖かさに困った。

田中さんは3年ほどで転勤してしまったので、真夏の幾度かの充実したセーリングは、思い出として脳裡に仕舞い込まれていた。

昭和54年、私の経営する石川コンクリート工業が「JISマーク」即ち「日本工業規格表示許可工場」の審査を受けることを決定した。その時、臨時アルバイトで来て呉れた大学生の加藤君は、ヨットと車が大好きという。「今のヨットはベニヤではなくてプラスチックです。船体は二重構造の中空で非常に軽いのです。少しの風でも良く走ります」という。「それはいいねえ『JIS』の審査に合格したら早速買おう。加藤君手配頼む」。

審査に合格。7月下旬の日曜日、加藤君とヤマハの社員が工場に来て、「シーホッパー」という型のヨットを車から降ろす。そして、フィッティング（艀装）を学ぶ。更にロープの結び方、ボーラインノット・エイトノットを教わる。このヨットには動力が無いので、「船舶運航免許」はが要らないが、簡単な「海洋法規」を呉れた。

次の日曜日、加藤君が工場に来了。2噸トラックにシーホッパーを積み、久里浜湾の道路から短い砂浜を二人でヨットを抱え、汀でフィッティング完了。ライフジャケットを付けて港内をセーリング。加藤君から手解きを受ける。昼食は傍のドライブインで済ませ夕方早めに終わる。

その後、妻や二人の娘を乗せた。上の娘の牧子が、友人の山田君を紹介して呉れた。彼は関東地区ヨット大会で、3位に入賞した実力者という。最初にヨットを「完沈」即ち「完全に沈没」させた状態から、如何に復元するかを学ぶ。次にヨットを操縦する身体の位置は、常に船外に出し、船内には膝下から足の脛で、ヨットの真中にあるフットベルトに足首を掛ける。これをハイキングアウトという。山田君の指導のお陰で、私の技量は格段に向上した。真冬でも乗る為に、寒さをカットするウエットスーツに身を固め、元日から久里浜湾で飛沫（しぶき）を上げ、45度北風に向かって斬り上がるセーリングは堪らない。

9月、浦賀の東西の叶神社祭礼の日、久里浜湾でワンピース姿の妻を乗せた。私はヨットパーカーにデニムのズボン。柔らかな南風はハイキングアウトを必要としない。千代ヶ崎を過ぎ、灯明堂のあった石垣を眺め、浦賀港に滑り込む。東叶神社の高い幟旗が目立つ。真正面に来た位置でヨットの中から参拝した。港内を更に進み西叶神社、ここでも幟旗と人の波。真正面で二礼二拍一礼。ジャイビングして鳥ヶ崎を廻り込み鴨居へ来た。渚の砂浜に近付き、八幡様を海上から参拝してタッキング。たたら浜までやって来た。この先は潮の流れが難しいのでジャイビング。今日は穏やかな南風のお蔭で船内で操船して久里浜に戻れた。

久里浜湾のセーリングだけに留まらず、三浦海岸でウインドサーフィンを、愉しむ若者たちの砂浜に来了。フィッティングしていると傍にやって来て会話が弾む。遂に競帆走することになる。上手く風を捕え競って走ったらヨットが勝った。彼等の技術は幼く新米なのだ。しかし、彼等は次第に技を磨いてきている、今競帆走したら私は完全に敗けるだろう。

失敗した。気が付かなかった。セーリングする時は、トランサム（船尾）を持って、バウ（舳）を砂浜付けて滑らせて運び、渚でフィッティングしていた。正月の寒い午後のこと、帆走していると船足が遅くなる。エアータンクに水が入ったようだ。原因は砂浜を引き擦ったのでバウに穴が出来た為か。急ぎ砂浜に着岸、重くて引き揚げられない。トランサムにある水抜きコックを開けた。水が勢い良く穴から吹き出した。波が来ると親指で穴を塞ぐ。苦笑いしながら漸くして水抜きを終わらせた。帰宅して失敗の顛末を、妻と元気で長生き進行中の母にも話した。

有難いことに友人の高北さんが経営する「サーフサイドビレッジ」に妻と二人が招かれた。初声三戸浜に建つ二階建ての真白なリゾートホテルである。青い相模湾の終わる上に、丹沢山塊・箱根連山を左右に従えて、富士山が神々しく聳えている。恰も阿弥陀如来が観音菩薩・勢至菩薩を左右に伴った阿弥陀三尊来迎図を、彷彿とさせる景観なのである。この眺めは一階の食堂からも、二階の客室のからも堪能できる。このホテルはヨットやウインドサーフィンの保管・預り預かりを業務として、教室も開かれている小型艇のヨットハーバーなのである。

人間には楽をしたがる本能がある。前日に「明日の朝シーホッパーをお願いします」と電話する。翌朝、冬にはウエットスーツだけで、着替えを袋に入れて車に乗る。ビレッジに着くとフィッティング（艦装）されたシーホッパーが、渚でセールを風にはためかせている。早速セーリング。ハイキングアウト。ふんぞり返ってバランスをとる。片手にティラーエクステンション（楫を操作する細い棒）もう片方の手にロープ。豪快に北風に向かっ

て45度で斬り上がるスピード堪らなくいい。昼食はウエットスーツOKなので、温水シャワーを浴びて、眺めのいい食堂で新鮮な握り寿司が美味い。午後も波と風を友にして、私の反射神経の衰えを遅らせようと願い飛沫を上げる。夕方ヨットを渚に乗り上げたまま、片付けもしないで風呂に入る。さっぱりとして西洋料理が、胃袋を満足させてくれる。心も体も満ち足りて帰宅する。

親しい友人からビレッジの食事や、セーリングを経験したいと頼まれ、弾んだ会話、風に向かって走るスピード感など、心豊かな思い出が私の、脳裡の筆筒の引き出しに収まっている。やがてボケ老人になり、筆筒の引き出しが開かなくなるだろう。開いているうちに書いておく。

(検索=F 1 F 2 ~ 6 宇都宮 ~ 4)